

漆黒に雪ぐ

井戸理恵子

昭和58年北見柏陽高卒

東京にいと「北見」を思うことが増えた。海外にいて日本を思うように。北見に帰るとさてどこを思うかと云えば、今は亡き人々のことばかり。そして、子供の頃に知覚していた風景を思う。北見の風景はとでも変わった。坂が無くなり、多くの植物が姿を消した。代わりに見知らぬ橋がかかり、見知らぬ花が咲いている。日本中どこにでもあるような「知らない」地名が区画に名付けられている。

そもそも北海道は「地名はその土地の文化である」という思想をもった探

潜んでいる。北見はかつて屈斜路湖ほどの湖であったことをアイヌは知っていたのだろうか？「黒い湿った異界」は日本人の「漆黒」という「表現」と重なり、その向こうに垣間みえる神々しいものすら感じさせる。

その昔北見の谷間に「フシコ・ヌプケシ・コタン」というアイヌ部落があった。「フシコ」というアイヌ語は「昔」「古い」が継続している状態を指すことが多く、古より人が「住み続けることが可能な程豊かな場所」であったことの証であり、アイヌが「カムイ」と呼ぶ、ヒト以外の世界、食糧をもたらす神々の世界との架け橋が常に継続してあったことを示しているように思われる。

検家松浦武四郎がアイヌ民族の言葉への畏敬をそのままに地名として遺されたものが今に息づいている。北見も「ヌプケウシ」という名前と呼ばれていた。日本語で「野の端」という。「野の端」と簡単に言い切れない歴史とアイヌ語のニュアンスがこの言葉には込められている。「端」とは日本語でも重要な場所である。「端」は「橋」[箸]「辺」と同音の言葉で指し示されているように異なるものを「繋ぐ」ものである。場所としての「端」は特別な世界との「境界」でもあった。

また、アイヌ語の本質から「ヌプ」を鑑みると「黒い湿った場所」であるとか、「古い沼、湖」といった意味も

そうした彼らにとって特別な地名で示され、共存していた我が故郷はカムイの気配すら遠い過去に葬り去ってしまった。今の人々が「無意識に」欲してやまない豊かな世界、宮崎アニメに描かれているような異世界との境界が到るところにある場所だったのに。高度成長期のヒトの理想は肥大化し、完全に麻痺状態で方向性を見失っている。ヒトはいつしか自然の一部でなくなってしまう。

北の暮らしは「冬」にある。ゆっくりと考える為に与えられた特別な季節。日本中四季が感じられなく、節句さえも軽んじてきた私たちに与えられた唯一の宝は雪に漱がれるあの真っ白

な光景かもしれない。今も昔も変わらなく全ての音をもかき消してしまおう。北見を思う人には優しい季節だけではなく、是非厳しい冬にこそ訪れていただきたい。

漆黒の異界に息づく豊かな時代「フシコ・ヌプケシ」に出逢うために。

【北見の方言】 北見地方にある(あった)方言をどれだけ覚えていますか。チャレンジしてみましょう!! 1. あずましい 2. ちよす 3. だはんこく 4. はんかくさい 5. いずい 6. なげる 7. かつける 8. おだつ 9. おがる 10. なまら 11. ゆるくない 12. ばぐる 13. ごんぼほる 14. げっぱ 15. かつちゃく 16. あめる 17. うるける 18. もちょこい 19. たくらんけ 20. こわい